
始まりから続く道

うな

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

始まりから続く道

【コード】

N9089W

【作者名】

うな

【あらすじ】

五年前、俺たちは約束を交わした。飽きるまでこのママゴトを続けよう、と。

ガラスのような空虚な瞳。幼い顔を縁取る黒の長髪。体はクラスの中で一番小さく、けれど手足は妙に長くて均整のとれたモデルのような体型をしていた。

「湊ルイという。以上だ」

湊ルイの中学デビューはその持ち前の容姿のお陰か概ね成功と言ってよかったように思う。素っ気無い自己紹介も緊張の表れだと受け取れば何ら問題はなく、初々しさ（あるいはクールビューティー）というオプシオンを付加した輩もいくらかはいたようだ。

学校が始まって三日、休み時間の湊ルイと言えば男女問わず誰かに話しかけられていた。対応はどれも淡泊だが誠実なもので、入学初日に巻き起こった男子内での湊ルイ人気は瞬く間に女子の間にも広がっていった。そっぴや、ちよつと派手目の仲良しグループのリーダーなんかは自分たちの仲間に湊ルイを引き入れようとしていたな。結果論になるが、アイツがどこかのグループに定住するなんてことはあるわけなかったのだけだ。

なんで俺がこんなことを記憶しているかという件の少女が目の前の席だったからである。既に学年一の美少女として名を馳せていた湊ルイを全く意識していなかったかと言えば当然嘘になるが、当時の俺の率直な感想は「騒ぐならどっか別の所でやってくれ」だった。春休み明けの体には六時起床は些か辛く、休み時間はずっと机に突っ伏して睡眠時間に当てていたのである。

さて。

湊ルイが本性を現したのは入学から四日目の昼休みだった。

中学生の適応能力とはものすごいもので、この頃になると既に仲良しグループが定着しつつあり、俺は俺で小学校からの友人たちと購買で買い求めたパンを貪り食うことに余念がなかった。幸いなことにうちのクラスでは孤立するような人間はおらず、伝説の便所飯

を敢行する猛者もいなかった。

実に平和な昼食タイムである　　と、その時の俺はジャンケ
ンで勝ち取った焼きそばパンを賞味しながら悦に入っていた。果て
しなくどうでもいいことだが、うちの中学の焼きそばパンの競争率
は非常に高く、一年の手に渡るものとなれば更に倍率は跳ね上がる。
この日、幸運に恵まれ我がグループの手中に収まった焼きそばパン
を更にジャンケンで勝ち取った俺は向かうところ敵なし、正しく阿
修羅の如き存在であったと言っている。無論そんなものは中坊の単
なる妄想に過ぎないわけだが　　この後焼きそばパンなんぞど
うでもよくなるほど驚くべき幸運が俺を待ち受けていたのだ！
…と、その時は思っていた。

「吉井」

焼きそばパンの余韻が残る至福の食後。いつものように机に突っ
伏して惰眠を貪ろうとしていたところ、俺の机に影が落ちた。そし
て、間もなく澄み渡ったソプラノボイス。

こんな綺麗な声のやついたっけ？　疑問に思いながら顔を上げる
と、そこにいたのはあるうことかあの湊ルイであった。

吉井。どこにでもある平々凡々な苗字ではあるが、組分けのお陰
で我がクラスに「吉井」と呼ばれるべき生徒は俺の他におらず、何
より湊ルイは真っ直ぐに俺を見据えている。窓から差し込む陽光に
濡れた黒髪がやけに艶めいていて、俺はしばし言葉を失った。

「吉井。目を開けたまま寝るな」

「い、いや、寝てねーけど。何か用かよ」

中学男子にありがちな反応その一「女子に対してはそっけなく」
を地で行く俺である。内心はドキドキしながらも、それを彼女に…
…いや、クラスの誰にも悟らせてはならないという謎の縛りを加え
た対応を当たり前のようにし、

「俺、いそがしーんだけど」

と、特に何の用事もないのに視線で時計を示してみせる。12:
55。俺が忙しかろうがそうでなからうが、もうじき数学の教師が

やってきて談話どころではない。しかし、湊ルイは頬を微かに緩めるだけのクールな笑みを浮かべて、核爆弾級の問題発言を投下した。「なら手短に言う。私と結婚を前提に付き合え、吉井一葉^{かずは}」
それが今から凡そ五年前、平々凡々だった俺の人生がトチ狂った瞬間だった。

「今日の弁当はなんだ、一葉？」

顔を上げると、春の柔らかな日差しに照らされたルイがいつものクールな微笑を浮かべていた。中学の頃からずっと伸ばし続けている艶やかな髪は膝まで届き、出会った頃は幼かった容貌も随分と大人びた。唯一誤算だったのはそれほど背が伸びなかったことか。160cm前後という女子にしては決して低いとは言えない身長も、モデル体型のルイにしてみれば少し物足りなく感じる。まあ……それを差し引いたところで彼女の美貌が損なわれることなんてあるわけもなく、相方として並んで隣を歩くだけで劣等感を刺激される完璧生物がそこにいた。

「……ルイ？」

「なんだ、また寝てたのか。本当によく眠るヤツだなお前は」

呆れたように肩を竦める。いつの間にか手にはシャープペン。何をされるかわかっていても体が即座に言うことを聞いてくれないのは非常にもどかしい。ペンを握ったルイの右手がスローモーションで振り下ろされ、視界から外れて数コンマ、頭頂部にびりっと痛みが走った。

「っ、てえ……暴力反対」

「お前がしゃきつとしないからだ。今この瞬間、ここが戦場にならぬという保証もないというのに。私の旦那としての自覚が足らん」「誰が旦那だ、誰が」

あと確実に戦場にもなんねーよ。

「私の口からそれを言わそうと？ 一葉も案外数寄者だな」

長い指で器用にペン回しをしながらのたまう自称嫁。誤解のないように言っておくと、俺とルイは婚姻関係にあるわけもなく、婚約もしていない。当然である。ここは現代日本だ、高三で結婚とかそんなファンタジーがあつてたまるものか。

「まあいい、早く昼食の用意をしてくれ。私は今非常に空腹だ」

「すまんが、今日は弁当を忘れた。おとなしく学食へ行ってくれ」

「スネるな。シャープペンを刺したぐらいで怒るようでは器が知れるぞ」

「いや、反抗精神の表れとかではなくて本当に忘れたんだつてば。そんなに疑うなら鞆の中見ろよ」

机の横に置いてあつたエナメルバッグを指してやる。ルイは不承不承といった感じで綺麗な顔を露骨に歪めてバッグの中身を改めた出てくるのは教科書と飲みかけのスポーツドリンクぐらいである。

ひと通り調べ終わった後、ルイは俺に耳打ちをした。何か、とても重要なことを伝えるように。

「おい、私の昼食はどこだ？」

「お前も人の話を聞かない子だね。さつきから忘れたと言ってるだろっ」

「それは嘘ではなかったのか、一葉！」

「自分の都合の悪いことは聞こうとしないの、悪い癖だと思うよ」

がなるルイを無視して、温くなったポカリを取り出して一気に飲み干した。あー……今は食い気より眠気だなあ。

「貴様……一葉！ 私にお前の手料理以外の昼食を食べるといいのか！？ この外道っ、あんな学食犬でも食わんわ！」

ひどい言い草である。学食のオバちゃんど利用者の皆様にお詫びをしる。よくうどんにそばの残骸入ってるけど、揚げ物が消し炭みたいだけど、そんなことは微塵も気にせずにお詫びをしる。

「もういい……一葉の弁当じゃないなら、いらん」

すっかり拗ねてしまったルイは恨めしそうに俺を睨みつけた後、

自分の席に戻っていった。流石に何か言うべきだろうかとも思ったが、春眠は暁すらも覚えないのである。俺はすぐにまた眠りに落ちた。

男子中学生にとって彼女がいるといないではかなり違いがある。

本人が幸せであるかはさして問題ではなく、余程見た目がモンスターでもない限りは彼女がいるだけで羨望の眼差しで見られるものなのである。

では、もしも学年一のキレイどころを彼女にできた俺は？ 答えは英雄に決まっている。アホな中坊はそんなことを考えていたに違いない。

「吉井、待ったか？」

通常運行の30分遅れ。

まだ5月にもならないというのに既に二桁のデートを敢行していた俺と湊……ルイは、定着しつつある公園で落ち合った。ちなみに今日は普通に学校に行った後のいわゆる放課後デートである。一度解散し再度集合する意味が俺には分からなかったが、ルイ曰く「待ち合わせのないデートなどデートではない」らしく、毎度毎度一回帰宅したあと私服に着替えて公園の時計下に集まるというのが定例となっていた。

で。

俺はだいたい待ち合わせの5分前にはいるのだが、ルイは一度として間に合ったことがなかった。普通ならこの辺り（あるいは告白の時点）で「この女やべえ」と気づくべきなのだろうが、初彼女で浮かれる中学男子にそのような思考などあるはずもなく。全く悪びれた様子もなく堂々と歩いてくるルイに「俺も今来たところだから」と、それが事実ならかなり問題がありそうな返しをするのだった。

ともあれ、デートである。

腰まで届く黒髪をポニーテールにし、全体的にふわふわした印象のガリー系ファッションのルイ。本人曰くファッションには疎い方らしいのだが、素材が抜群にいいお陰か何か色々キュンとした。

「吉井、手を出せ」

「お、おう」

「よしっ、では行くぞ」

俺の手をぎゅっと握ってルイは歩き始めた。ルイ式デート必須要項その二「手は基本的に繋いでなんぼ」である。シャイボーイには少しばかり刺激が強い気もするが、毎回やっているとそれなりに慣れるものである。ルイの手を握り返して隣に並ぶ。

そのまま二十分ほど歩いてバス停に向かい手つなぎのまま乗車。学校帰りの学友たちの視線を浴びながら十分もバスに揺られれば、若者の遊び場である都市部に到着する。

「小腹が空いた。なにか食べるぞ」

これまた放課後デートのお約束、ルイのハラペコ宣言。あの細っこい身体はどこに入るのか謎だが、ルイの健啖家ぶりは野球部員のそれとそう変わらない。

「んじゃ、マックでいいか？ あんまりお金ないし」

「バカ！ デートに金を使わずにどうする、貴様それでも私の旦那か!?!」

「いや、旦那ではないと思うけど」

「うん、今はまだ違うな。けど、将来的に考えると旦那で合っているから私はそう呼ぶことにしているんだ」

何の話だ。

よくもまあ、こんな女と交際をするつもりになったな俺よ。いくから見てくださいが良くても、こんな調子じゃ千年の恋も冷めそうなんだが。ま………なんの奇跡か冷めなかつたから今があるわけだけど。

「よし決めた。今日はサイゼリヤでハンバーグを食べるぞ！」

「ええ………ハンバーガーで我慢、」

「できん！ 熱々の鉄板が私を待っているのだ！」

そう言つてズカズカ足を進めはじめ。当然ながら手を繋いでいる俺も引つ張られる形になり、いやハンバーグならびっくりドンキーだと方向修正をかけた結果、たかだか間食で千円近く使つてしまつという大惨事を招くこととなつた。

「もうまじで金ないぞ、ルイ」

ほくほく顔で隣を歩く美少女を睨めつける。ポイントはあまり顔を見ないようにすることで、そうしないと可愛いからいいかと日和つてしまつことうけ合いなのである。しかし、顔を見なかつたら見なかつたで睨みつけているというよりどこかを凝視してるみたいで変態っぽくなるから注意が必要だ。

「まあまあ。今日のデートはあまり出費がでないように組んであるから安心していいぞ。必要なのは金ではなく未来を見通す慧眼！

私の旦那になるのだからそれぐらいの能力はつけてもらわねばな！」

何を言ってるんだらうねこの娘は。うん、俺もなんでここで頷いてるんだらうね。もうわけがわからないね。

「さあ、着いたぞー！」

「着いたぞつて……」

ルイに導かれるままにやってきたそこは価格において他店を圧倒していることに定評のあるらしい家電量販店だった。何か目当てのものがあつたのだらう、ルイは一目散にフロアの奥へ進み、

「さ、どれがいい？ 二人の共同生活に必要なものばかりだ！」

「これなんかいいだろ？ ほら、テレビの前から離れると勝手に電源が切れるんだ。節電ブームだからな、今は」

「やっぱり時代は斜めドラムだな。靴の乾燥だつてできるんだぞ」

「私、このホームベーカリーを買ったら毎朝お前にパンを焼いてあげるんだ……」

実にノリノリで『新生活応援！』とポップがついた家電を解説し

てくれた。いつになく感情豊かで目を輝かせるルイはそりやもう可愛くて、何でこんなところにいんの俺？ という疑問を銀河の彼方まで吹き飛ばす程度の威力は備えていた。

まあ、たまにはこんなのもいいかもな。いつものようにルイの可愛さに日和ってしまった俺は傍から見たらドン引きするぐらいのテンションで家電という家電を見て触って体験して、最後に掃除機のコーナーに辿り着いた。

「吉井、吉井っ！ 可愛いぞこれ、これすっごく可愛いぞ！」

と、全自動掃除機のコーナーではしゃぐルイが一番可愛いわけだけど、そんなこと口にできる中学生は中学生ではないので主語を省略して小さく「……可愛いな」と言っておく。

「いいなあ、このフォルム。まだ出始めでコスパは良くないけど、欲しいなあ……」

ルイが夢中になっっているそれは背の低い円柱形で、透明なアクリル板で仕切られた空間を律儀に行ったり来たりしていた。ゴミのつもりなのだろう、そこらに散らばった小さな紙くずやビーズをういんういん音を立てながら全自動掃除機が吸っていく。ルイは飽きもせずそれを眺めて「いいなあ、可愛いなあ」と連呼している。

「ルイは、家電とか好きなのか？」

何気ない言葉だった。学校ではクールで男前な彼女が見せた無邪気な表情からその推測が導きだされた、ただそれだけのこと。

けれど、どうやらルイにとってはそうではなかったらしい。キョトン、と虚をつかれた表情になり、不思議そうな上目遣いで俺を見た。

「好きに見えた？」

「え？」

「私が、家電を好きに見えたのか？ どうして？ 何を根拠にそう思ったんだ吉井？」

何かのスイッチが入ってしまったのか、捲し立てるように言葉を浴びせてくる。俺はルイの突然過ぎる変化に到底ついていけず、ほ

ば無意識に繋いだ手を強く握った。ルイもそれを握り返してくる。何が起こったのかはよくわからない。けれど、何かルイの中で大きな変化が起こっているように思われた。

「よし、今日からお前を一葉と呼ぶぞ！」

「は？」

「旦那としての訓練もレベルを上げるぞ。まずは手始めに裁縫の特訓だな」

言い放ったルイの顔は真夏の太陽のように眩しくて、その笑顔はいつものクールな顔とは違った魅力があった。

「一葉、おい起きろ一葉。もう放課後だぞバカモノ」

「んあ？ ルイ……？」

「ルイ……？ じゃない！ 新学期早々呆けよってからに。いくら就職先に内定が決まってもこのダラケっぷりだと取り消されるぞ」

就職先？ なんの話だろう。俺はまだ高校三年生になったばかりである、どんな内定が出るというのだろう。ま……どうでもいいか、そんなこと。

「なあ、ルイ。この後、どこか行こうか？」

「一葉から誘ってくるとは珍しいな。何か、面白いものでも見つけたか？」

「まあな」

エナメルバッグと薄っぺらな学生鞆を担いで席を立つ。右手は自然とルイの方へ……ほとんど間をおかずに冷たい指が絡んでくる。

「デートか？」

ルイの切れ長の目がじーっとこちらを見る。俺は怒られるのが嫌なので事前に断りを入れておく。

「待ち合わせなしの簡易式で。あと、ハンバーグ食べよう。お腹空

「いてるだろ？」

「無論だ。誰かさんが昼を忘れたせいだからな、どう責任をとるつもりだ？」

「奢りで」

「よし、許す」

即断。クールな笑みを浮かべるルイをしばし眺めた後、いつか散財したハンバーグレストランへと向かった。

「ふう……満腹満腹」

「……ちよつとは遠慮しろよな」

学校を出発してから一時間後、ほくほく顔のルイと軽くなった俺の財布。彼女の健啖具合は相も変わらず健在で、戦闘力の一番低いおじ様が三人も旅立たれた。ガツデム。

「たまにはああいう濃い味付けもいいな。一葉の料理は薄味だから」
「素材の味を楽しむためだ。あと、お前はドカ食いするから塩分とか気いつかうしな」

「うむ、それでこそ私の旦那だな。心遣い、嬉しいぞ」

「色々と今更過ぎるが、感謝の気持を忘れないのはいいことだな」
そんな益体もないことをべちゃくちゃ喋りながら目的地へ向かう。行き着く先はいつかの家電量販店。

「ほお……面白い趣向だな」

デカデカと看板を掲げられたビルの前。ルイも俺の意図に気づいたようで、ニヤリと笑った。

「それじゃ、行くか」

五年前のルイに習って手を引いて奥のフロアへ。ずんずん進むうちに、デジャヴを誘うような光景が現れた。

『新生活応援！』のポップ。五年やそこらでは商売の仕方はそう変わらないらしい。中学生の頃見たそれらとどれ程の性能差があるのだろうかと考えながら思い出をなぞるように様々な家電を見、触れ、体験していく。

「へえ……なるほど」

ルイは静かだった。家電巡りの最後、記憶の中のそれよりも一回りほど大きくなり遥かに器用な動きを見せるようになった全自動掃除機を前にしても童女のようににはしゃぎ回ることもない。

「なあ、覚えてるか？ お前、ここで「私が家電を好きに見えたのか？」って聞いたよな。五年前、初めて俺をここに引っ張ってきた時」

言葉に、ルイの視線がすっと虚空を捉えた。まるで、在りし日の思い出を見つめるように。

「よく覚えている。私は、お前に私がどうして家電を好きに見えたのかを聞いたただしたな。そしてその後……お前を、一葉と呼ぶようになった」

懐かしむようにルイは呟く。目はどこか遠くを きっと五年前の俺たちがいた空間を見据えている。

「一葉。逆に私もお前に聞きたいんだが……」
過去を捉えていた瞳が焦点を結び、俺を見つめた。目線で頷くと、ルイは繋いだ手を握りしめながら言った。

「五年だ。私たちが付き合い始めてから五年が経った。私はあの日お前に言ったな。どうして私がお前に告白したのかを。そしてお前と約束した。飽きるまですつとこのママゴトを続けよう」と

思い出す。あの日、あの時、全自動掃除機を大喜びしながら眺めていたルイが俺に言った言葉。俺を名前で呼んで、旦那として鍛えてやると宣言したその後。不意に光を消し去ったガラス玉のような瞳で彼女は言った。

誰でも良かったから、君にした。

「今一度お前に訊こう。私とのママゴトは楽しいか？」

ルイの双眸。俺を見つめる瞳はかつてのガラス玉ではなく、爛々と輝く光が見えた。

「安心した。ルイもママゴト楽しいみたいだな」

「む？」

「俺もお前と同じだよ。すっげえ楽しい。まだまだ飽きるには早すぎる」

握った手を更に握りしめて、事前に考えていたのか今思いついたのか謎の言葉を放つ。

「来年は、買えるといいなあこれ」

俺一人の資金では到底無理そうな金額の全自動掃除機を指さして言った。ルイは、

「ふむ、甲斐性の見せ所だな」

なんてバカ正直に頷いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9089w/>

始まりから続く道

2011年9月22日03時31分発行